

入院

第10期OB 石井 隆太

昨年度までの2年間のゼミ活動を終えて、同期生が就職1年目を迎える中、今年度、私は修士0年生という立場でゼミに置いてもらい、いろいろと学ばせて頂きました。秋学期からは小野先生の大学院授業にも出席させて頂いたため、昨年度までの2年間のゼミ生活にも増して、プレゼンを聞いてコメントを返さなければいけない機会が増えました。ただ、このコメントなるものは、意外とやっかいものです。先生や大学院生の先輩方は、私ではまったく気づくこともできないような良いコメントをされるので、私も良いコメントをしなければと思い、まずは他の人の真似をしてみようかと考えました。しかし、これが、まったくうまくいきません。他の人の真似をしたときの、そのコメントの良し悪しの基準は、どのくらいモノマネがうまくいったかですので、オリジナルを超えることはできやしません。あれこれ考えた挙句、良いコメントをするためには、わからないことに素直になるしかないという結論に至りました。

わからないことに素直になるのは、私にとってはなかなか難しいことです。というのも、相手の話の中のわからないことに対して、ついつい、わかったフリをしてしまう癖があるからです。それをやってしまうのが、単にわからないということが恥ずかしくて言い出せないからなのか、はたまた、わからない部分も勝手に推測してしまうからなのかは、はっきりしません。どちらにせよ私は、わからないという事態から目を背けて、見て見ぬ振りをして、ごまかそうとする癖があるようです。けれど、良いコメントをする人は、きっと、わからないことに対して素直なのではないかと思います。相手の話を聞いて、どこがわかって、どこがわからないのか、それらを真摯に考え、それらを包み隠さず述べているように見えます。そして、そうした指摘にこそ、周囲の人からは往々にしてわかったフリをされている内容で、かつ、見逃されているような欠陥が含まれていることが多いように思います。

わかったフリをしてしまう癖は、もしかしたら、多くの人のもっているものなのかもしれません。ビジネスでも研究でも、本当はわからないことなのに、ウソをついてわかったフリをしてしまえば、問題は問題とならず、課題も生まれず、それゆえ、改善もないように思います。逆にいえば、その癖をなおして、相手の話の中から、わからないことを上手に切り取れる人は、問題や課題を見つけ、改善につなげられる賢い人なのでしょう。例えば、「頭が切れる」、「利口だ」、「頭脳明晰」などの賢い人を表す言葉に、切り取るという意味がこめられているのも、偶然ではないはずです。

さて、私は来年度から、慶應義塾大学大学院（商学研究科）に、入院する予定です。わからないことに対して素直になれず、わかったフリをしてしまうという悪い癖をなおすために、精一杯励んでみようと思っています。